

工学情報



生体と工学

日本建築構造技術者協会 JSCA 賞受賞について

仁藤 喜徳

(平成7年東京電機大学大学院建築学科修了)
engineers network Co., Ltd.



仁藤喜徳 (にとう よしのり)

〔プロフィール〕

1969年 東京都生まれ
1995年 東京電機大学大学院建築学科修了
同年 構造設計集団 (SDG) 入所
1998年 デューハースト・マクファーレン・アンド・パートナーズ入社
2002年 藤川由美氏と engineers network Co., Ltd. を設立。現在に至る

主な構造設計作品：

サムソン生命保険ビル (韓国)、フィラデルフィアパフォーミングアートセンター (米国)、プリンストン大学遺伝子工学研究施設 (米国)、森アーツセンターミュージアムコーン・東京シティビューほか

主な受賞：JSCA 賞新人賞 (2003)

私は「森美術館・ミュージアムコーンの構造設計」で2003年度 JSCA 賞、新人賞を日本建築構造技術者協会 (JSCA) から頂きました。構造設計家にとって大変名誉な賞であり、妥協せず継続して行ってきた創作活動の結果を尊敬する構造設計家の皆様に評価していただいたことは、私にとって大変貴重なものであり、今後の設計活動において、更なるやる気を与えて頂きました。

受賞対象となったミュージアムコーンは、今年4月にグランドオープニングを迎えた六本木ヒルズを中心とする超高層ビルの最上層部分に位置する展望台、美術館へ人々を導くエントランスとして同ビル足元に建設されました。人々が今までに例の無い空間を通じて、創造力をかき立て、建築の素晴らしさと可能性が伝わるような美術品としての建築の実現を目指しました。

今までに数々のプロジェクトに携わってきましたが、個人的にミュージアムコーンには特別な思い入れがあります。私は試行錯誤を繰り返した末に辿り着いた実現案である「斜めケーブルと水平圧縮リングからなるケーブルネットシェル案」を建築家に推薦したのですが、残念ながら建築家は、それとは全く異なるシンプルなケーブルトラス案を施主への提出用最終案としました。細部のディテール、施工方法までイメージが完成していたシェル案を簡単に諦めることが出来ず、建築家のトラス案資料の作成後、シェル案の模型を一日で作成し、施主へ提案したところ、世界に例の無いユニークな構造体が大変気に入っていただき採用となりました。それ以来、構造家である私に、施主と建築家から絶大な信頼を頂き、構造体の特殊性から構造家を中心となって設計を発展させていく大変特殊な環境で設計が行われました。

普段から構造家 (設計者) の役割と責任、建築家とのコラボレーションと業務分担、構造デザインの可能性について考えさせられる私にとって、この物件を妥協せずに、イメージ通り美しく完成させることによって、人々の構造設計者への認識を少しでも変えることが出来るのではと考えました。私が構造デザインを志す人々の代表であると勝手に思い込み、少しでも構造設計者の立場向上とデザイナーとしての能力を再認識、評価してもらいたいと願いました。

ミュージアムコーンの構造デザインは、斜めケーブルを可能な限り細くすることで、その存在を曖昧にして、空間を水平に切り裂くリングを強調させ、浮遊させることを目指しました。構成する各要素、素材を適材適所に、適切なサイズで配置し、それらの能力を最大限まで効果的に発揮させることで、鉄の力強さ、軽快さが強調され、その魅力が十分伝わるような構造体を実現出来たと思っています。

構造体を覆うガラスは全てリングから持ち出される金物で点支持され、主役であるリングの連続



写真1 全体夜外観 (テレビ朝日ビル屋上より)

性を損なわないように配慮しました。ガラスはそれぞれがオーバーラップし、上端はリング幅内に納まり、下端はリングの外側に跳ね出すことから、断面上でジグザグ形状となって雨水の進入を防ぐと同時に外装に変化をもたらしています。

私はアメリカを活動のベースにしているため、日本の関係者との情報交換を当初心配しましたが、アメリカと日本では昼と夜が逆ですので、質問事項を夜に連絡しておくことで、寝ている間に片方が返答準備し、朝には手元に返事が届いている大変効率が良いものでした。建築のように多くの人が関係し、皆の力を合わせて現実化していく作業において、私の設計スタイルを理解してくれる人々との会社の枠を超えた個人の強い信頼関係を築くことは必要不可欠であり、ミュージアムコーンを実現するために多くの人と素晴らしいコラボレーションを築けたことがプロジェクトを成功に導いたと感じています。

大学を卒業して以来、絶えず厳しい選択をして、建築に取り組んできました。幸い、建築は長い月日を掛けて実現されますので、特別な才能が無くても、継続してデザインの可能性を追求し続ける



写真2 内観 (螺旋階段より)

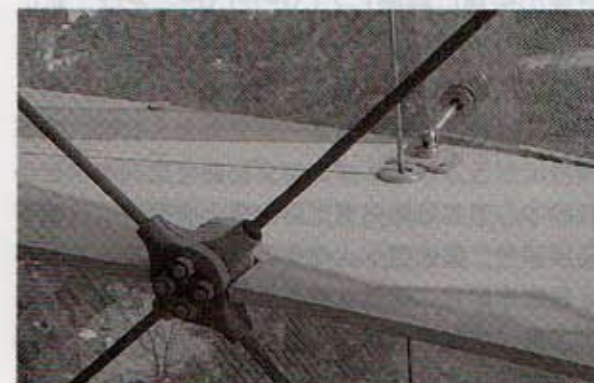


写真3 水平圧縮リング、斜めケーブル及び各接合金物、外装ガラス

根気と責任感があれば、必ず良い結果が生まれると信じております。

そのために私は建築を通して、大きな視野を持って取り巻く環境と社会にアンテナを張り巡らせて、可能性を秘めた素材と物事を絶えず模索し、これからも建築、構造デザインの新しい可能性を考えていきたいと思っています。そうした日々の努力によって、必要な時に実現する準備と勇気、チャレンジ精神が生まれると思います。

特別な才能、技術があるとは思えない私は賞というものに縁が無い人間であると思っていました。とにかく、建築に人一倍興味があり、物事を創造し、イメージしたことを図面化し、それが実際の形になって現れるスリルと達成感から、この仕事をしている自分が本当に幸せだと感じています。

今後も頂いた賞に恥じぬように、人々の心に残る建築の創造を目指していきたいと思っています。